

後期ローマ帝国における負担 *munera* 免除特権をめぐる (浦野)

オスマン帝国末期のユダヤ教徒問題

設 樂 國 廣

はじめに

ユダヤ人が近代および現代の中東で問題になるのは、シオニズム運動に関連するものが主である。とくにパレスチナ問題が最も注目されている。十九世紀の東ヨーロッパでは、ロシアを中心にユダヤ教徒に対する圧迫が強大となり、ユダヤ教徒の一部には国外脱出に走るものもあった。西ヨーロッパでユダヤ教徒へのキリスト教徒による圧迫は、十九世紀末になって激しくなり、フランスにおけるドレフュス事件等で明らかのように、国家体制の問題と連動している。国民を形成することはヨーロッパの近代国家成立の要点であり、国家は国民という統一体を必要としていた。統一性の基本として言語の一致性が重要な要素の一つであった。

ユダヤ教徒は、言語面では、ヨーロッパの居住地の言語を日常会話とする点で問題は少なかつた。しかし、ヨーロッパ社会がキリスト教世界と一般的に認識されてきた点から、宗教の不一致性が問題とされてきた。これが、近代西ヨーロッパにおけるユダヤ教徒圧迫の原点であった。

わが国においてシオニズム問題に関して、シオニズムの対象地とされたパレスチナの地を支配していたオスマン帝国での対応については先行研究がみられない。オスマン帝国では、ユダヤ教徒の大部分が、サラニカをはじめ、イスタンブルなどの大都市を中心に居住していた。パレスチナのユダヤ教徒居住者は少なく、わずかにイェルサレム近辺喜捨を受けながら生活していた。このような背景を一九〇八年の憲法復活前後のサラニカの動向を含めて考慮しオスマン帝国におけるシオニズム運動の展開過程を考えたい。

一 オスマン帝国のユダヤ教徒

オスマン朝は完成されたイスラム国家と称されるように、イスラム教徒すなわちムスリム中心の国家である。しかし、ヨーロッパのようにキリスト教徒以外を排除したキリスト教世界とは異なり、オスマン帝国領内にはキリスト教徒やユダヤ教徒も多数存在していた。イスラム世界では、ユダヤ教徒やキリスト教徒に対して改宗を強制することはなかった。

オスマン帝国は広大な領土の基本的統治形態として宗教別支配をとっていた。すなわち、イスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒などが、宗派別にミレットすなわち宗教共同体を構成し、国家に統治されていた。各ミレットはその首長の下に統括され、納税等はこれらのミレット別に徴収されていた。イスラム教徒のミレットはイスラム教成立期にできたウンマが原形である。イスラム教徒のミレットは、イスラム法によって運営されていた。イスラム教徒以外のミレットにおいては、各宗派の慣行や伝統そして一部の裁判に関する権利も保障されていた。

十四世紀はじめのオスマン朝成立期には、ビザンス帝国からブルサを獲得したときに、この町の居住者に生糸の取

史苑（第五六巻二号）

引に従事するユダヤ教徒の存在が知られる。また、オスマン朝がコンスタンティノープルを征服した後、コンスタンティノープル復興の手段として減少した人口補充のため、各地から移住を奨励したが、この中にも多数のユダヤ教徒が含まれていた。ユダヤ教徒は西ヨーロッパで、古くから圧迫の対象となっていたが、十五世紀末、イベリア半島のレコンキスタの進行にともなって、イベリア半島からイスラム勢力は排除され、キリスト教徒による支配が確立した。この時、キリスト教徒は、キリスト教化を推進し、イスラム教徒と共にユダヤ教徒を弾圧した。ユダヤ教徒のなかにはキリスト教への改宗を受け入れるものもあったが、居住地を去ってイスラム世界へ移住するものが多数あった。彼らの一部はオスマン帝国に収容され、イスタンブルやサラニカに移り住み、サラニカでは十九世紀には都市人口の過半数がユダヤで占められていた。

二 シオニズム運動と国民国家

シオニズムは、オーストリアのテオドル・ヘルツルの提唱した運動である。ユダヤ人の国家を建設し、ここに工業立地にもとづく国家すなわちヨーロッパ型の近代国家を建設することであった。その場所は、パレスチナやアルゼン

チンが候補としてあげられている。イギリス政府は、アフリカの自国の管理地ウガンダを提供することを申し出ている。

テオドル・ヘルツルはシオニズムを著書『ユダヤ人国家』で提唱した。「ヨーロッパのユダヤ教徒が迫害を受けている。たとえば、ドリユフス事件などをあげることができる。これらのキリスト教徒のユダヤ教徒迫害は、ユダヤ教徒が祖国を追われて流浪の民となっているからであり。ユダヤ教徒の国家を建設することが急務である。」とその動機について述べている。「われわれは一つの民族、同一の民族なのだ」と述べ、「私が我々を一つの民族、同一の民族と呼ぶとき、それは反ユダヤ主義を助けることになるという」抗議を受けるとして、一つの民族との問題を提起している。フランスのユダヤ人にこの問題が起きているとする。そして、フランスに「同化」してしまった「同化ユダヤ人」はイスラエル系ユダヤ人であるとしている。そして、「我々は一民族である——我々には、一つの国家、それも模範的国家を形成するだけの力があるのだ」としている。以上のことから、テオドル・ヘルツルの主張はつぎの通りである。ユダヤ人とは、民族である。すなわち、宗教とは別に民族的つながりを維持していると主張している。それ故に、近代の国家形成に必要な国民としての存在になり

うる要素を持つていと主張している。

ユダヤ人^{ユダヤ}はユダヤ教徒を意味するものであって、民族的範疇を規定するものとは言いがたい。ユダヤ教は、ユダの住民がバビロンに移動させられ、アケメネス朝ペルシアによって、イェルサレムに帰還させられたときに、かつてのユダの住民によって教団として成立した宗教とされる。しかし、十世紀ころカスピ海周辺に建国されたハザール王国がトルコ系遊牧民で構成された国家であったにもかかわらず、ユダヤ教を国教としていた。彼らが、その後、ロシアから東欧に移動したことが、今日東欧諸地域に多数のユダヤ教徒が存在する理由の一つであろう。これらのことから、ユダヤ教徒が「民族的」に一つであることは一概に言えない。さらに、多元的なユダヤ教徒の存在は、文化的にも同一性を持つているとはいえず、言語的にも同様なことが言える。

それ故、ヨーロッパでユダヤ人と区別される存在は、民族的存在ではなく、宗教的存在である。ヨーロッパを覆うキリスト教的範疇の中で、近代ヨーロッパ社会は言語文化を中心として民族形成がなされ、近代国家は民族を国民単位として成立していった。ヨーロッパでは、宗教的区分はキリスト教単一が強調されていたため、宗派の問題は生じたが、他の宗教は注目されなかった。このため、宗教的区

分による存在である少数派のユダヤ教徒は、国民を構成する枠の外に置かれて、近代国家は成立していった。

しかし、近代国家において、少数派のユダヤ教徒資本家が成長し、近代ヨーロッパの中で、彼らの影響力は増していった。この結果、ユダヤ教徒はヨーロッパでは考えられ ていなかった宗教による民族概念を創設することによって、近代国民国家を形成するための国民としての統一性、いわゆる民族の創出、近代国家形成の仲間入りをはかる試みとしてシオニズム運動を生み出した。しかし、すでにヨーロッパでは、国民国家形成が終了し、国境の線引きが完了していたために、ユダヤ教徒は自分たちの国家建設する土地として、ヨーロッパ以外に土地を求めた。

三 オスマン帝国とシオニズム

シオニズム運動はキリスト教徒による迫害から逃れるためにユダヤ教徒が国家建設をしてそこにユダヤ教徒を国民とする国家を建設することを目的としていた。その建設地はシオンの地とされるオスマン国内のパレスチナであった。

この対象となった地域を領土とするオスマン帝国ではシオニズム運動は存在しなかった。オスマン国内のユダヤ

教徒は迫害の対象となっていなかった。ユダヤ教徒は、オスマン帝国からトルコ共和国に至るまで、政府と対立的存在にもなっていない⁷⁾。オスマン帝国ではユダヤ教徒が弾圧の対象となっていなかったことから、弾圧を逃れていく必要は理論的に存在しなかった。さらに、ユダヤ教徒の多くは、大都市において商業活動やその他の業種に従事していたことから、商業都市としての機能を十分に持っていないパレスチナに移住する必要もなかった。きわめて広範なネットワークを持っていたユダヤ教徒は、オスマン国内でミレット制による自治権を保ち、ヨーロッパも含む地域で活動を続けていた。

当時のパレスチナは、オスマン帝国のシリヤ州（ヴィライェト）にあるひとつの県（サンジャク）であった。この地にはごく少数のユダヤ教徒が居住していた。この地にユダヤ教徒が移住できるのはオスマン政府発行の移住権利書が必要であった⁸⁾。パレスチナのユダヤ人の人口は、一八八二年には二万四千人、一八九〇年には四万七千人、一九〇八年には八万人、一九一四年には八万五千人であり、都市部だけではなく、二十六の農業コロニーにも居住していた⁹⁾。イェルサレムには、一九世紀初頭には約一万五千人ほどのユダヤ教徒が居住しており、彼らは世界各地のユダヤ教徒組織からの寄付を集め、それによって生活していた¹⁰⁾。

一八八一年ころからロシアでユダヤ教徒弾圧が激しくなり、アメリカ等へ移住をしてみたなかで、一部のユダヤ教徒は、移動距離の短いパレスチナへの移住を望んでいた。ユダヤ教徒がパレスチナで多数となることを嫌ったアブドゥルハミド二世は、一八八三年移住を禁止した。しかし、巡礼のためにパレスチナを訪れることを希望するものには、三カ月間有効の、赤いビザ（クルムズ・テズケレ）を発行し、定住は認めなかった。

これらのことから、一八八〇年代の初頭からロシアのユダヤ教徒がパレスチナの地に移住を開始していたことを示している。この移住にあたっては、西ヨーロッパのユダヤ教徒であるロスチャイルドはじめ、さまざまな組織が支援している。移住してきたロシアなど東欧からのユダヤ教徒は、土地を購入し、農業居住地区を形成して農業に従事した。しかし、支援者のロスチャイルドの植民地に於ける商品作物の生産を考える方針もあり、さまざまな問題を生じさせていた。

ロシアのユダヤ教徒にとっては、国外脱出の最も近い場所で、理論的に納得のできる地域がパレスチナとされた。テオドル・ヘルツルの唱えたシオニズムは、政治的な方向性を持っていたために、各国の政治家との交渉を優先し、国家建設の可能な地を求めていたために、アルゼンチンや

ウガンダを候補に揚げざるを得なかった。しかし、ロシアからの移住希望者にとって、彼らの移住がオスマン帝国のスルタンの不許可に対して移住の正当性を主張するためにも、移住目的の地はパレスチナの地でなければならなかったのである。

しかし、この移住は国家建設を目的としてはいなかった。このため、工業立地の近代国家建設を目指すシオニズム運動とは言えず、パレスチナ移住運動とされるものであった。

五 テオドル・ヘルツルとオスマン帝国

オスマン帝国とシオニズムとの接触は、テオドル・ヘルツルのオスマン朝スルタン、アブドゥルハミド二世との交渉から始まる。テオドル・ヘルツルは『ユダヤ人国家』を著した後、紆余曲折の後パレスチナをシオニズムのユダヤ人国家建設地として、計画を推進した。

一八九六年六月、テオドル・ヘルツルは、イスタンブルを訪問した。その目的はスルタン、アブドゥルハミド二世と会見しシオニスト運動について説明し、パレスチナの地にユダヤの自由な活動ができる土地として、エジプトやブルガリアのような自治的なユダヤの管理権をもつことを要求し、その代償として、オスマン政府がヨーロッパの列

強から受けている借款の肩代りの申し出であった。スルトンとの会見には、ポーランド人のフィリップ・ネウリンスが仲介した。テオドル・ヘルツルは、大宰相や、さらに幾人かのオスマン政府高官とも会見することができた。彼らを通じて、テオドル・ヘルツルはスルトンに対してユダヤの国家の計画についての申し出を提出することができた。しかし、彼の申し出は、国家の分割を一切認めないとの立場から、スルトンによって拒否された。スルトンはいった。

私は一片たりとも我が国土を売却はしない。我が領土は私の所有物ではない、我が国民の所有物である。我が国民は、この帝国を戦争によって血を流して獲得したものである。彼らの血によって祖国の富は形成されたのである。この領土を略奪され敵の手に入れようとするとするならば、我々は再び血を流しても護りきるであろう。

我がシリア、パレスチナの連隊の兵士たちは、プレヴィネで戦死した。彼らの中の帰還しない者は戦場に命を落としてきたのだ。トルコ帝国は私の所有物ではない、トルコ国民の所有物である。私は、我が領土を一片たりとも人の手には与えない。何も求めない、ユダヤ教徒の千万の申し出も。我が帝国が分割されるとき、彼らは、パレスチナを無償で手に入れることができる

史苑（第五六巻二号）

だろう。しかし、それは、我々の死体を分解することである。なぜならば、私は生きてまま自分の体を切り刻むことを許しはしないからである。

彼は、ネウリンスキからスルトンからの返答としてこれ聞き、イスタンブルを離れウィーンに帰還した。

テオドル・ヘルツルは、その後一八九八年、一九〇一年、一九〇二年の三回にわたってイスタンブルを訪問している。テオドル・ヘルツルのアブドゥル・ハミド二世との直接会見は、一九〇一年のイスタンブル訪問時にアルミス・ヴァンベリ⁽¹⁵⁾の仲介によって実現した。この会見で、テオドル・ヘルツルはアブドゥル・ハミド二世にオスマン政府の借款の支払いについて説明した。しかし、アブドゥル・ハミド二世は会見はしたもの、この件についてはまったく否定であった。アブドゥル・ハミド二世は、テオドル・ヘルツルのシオニズム運動について強く反対していたにもかかわらず、このときにテオドル・ヘルツルにオスマン帝国のメジディエ三等勲章を授与している。反対者に恩を着せて自分への反発を和らげようとしたアブドゥル・ハミド二世の常套手段であったのであろうか。

アブドゥル・ハミド二世のスルトン府官房長官であったタフシン・パシャは、回顧録でこの時の状況を、「トルコで一つのユダヤ教徒国家を建設するためにシオニスト」⁽¹⁶⁾が

活動を始めた。彼らは、「この目的を實現するために、数回にわたって行動を起こしたが、まったく成功しなかった。」と述べており、「この活動の背後には有名な銀行家のロスチャイルドが存在していた。」¹⁸として、ロスチャイルドが借款かたがわりの財源であったことを示唆している。アブドゥルハミド二世とテオドルハヘルツルの直接会見については「ある金曜日（1902年）の礼拝のあとで、アブドゥルハミド二世はそのユダヤ教徒を引見した。ウイーン生まれのシオニストは、問題を説明してスルトンに申し出を行った。」²⁰「このウイーン生まれのユダヤ教徒の個人的に持っていた問題の重大性と、国際債務管理局に關係する申し出を確実に經理問題としてアブドゥルハミド二世に説明した。」とテオドルハヘルツルが、ユダヤ国家建設の代償として国際債務管理局のオスマン帝国に対する負債額を軽減する提案を示していたことを示している。

その後、一九〇二年のイスタンブル訪問でテオドルハヘルツルはアブドゥルハミド二世がシオニズム運動への反対はきわめて強く、これ以上の交渉でも成果をあげることが困難であると確信したとされる。新たな方法を模索し、オスマン国内のユダヤとの協力がその一つの方法とされた。オスマン国内のユダヤの結集によって、ギリシア独立と同じようにユダヤ国家建設を考えた。オスマン国内

のユダヤ教徒の多数居住する都市はサラニカが最大で、ついで、イスタンブル、イズミルであった。

六 サロニカとシオニズム

シオニズム運動家の一人ヤコブソンは、オスマン帝国のユダヤ教徒人口十七万三千人にたいして、そのうちの八万人の人口が集中しているサラニカを目標に定めた。イスタンブルはユダヤ教徒人口が多数ではあったが、政治的中心であったことから、ここを避けた。しかし、ユダヤ教徒全体からすると、あえてシオニズム運動に協力して政府と対立を求めるものは少数であった。シオニズム運動に反対するものさえ多数存在した。

サラニカにおいてシオニズムに協力的な人物は、次のよう
な人たちであった。²³

サラニカ市のハム（ユダヤ教の長老）であるヤコブソン、
メイエル、ユダヤ教徒系地方新聞の社主であるサアディン、
レヴィ、サラニカ市長のヨゼフ・ナオル、そのほかニッ
ン・マスリヤフ、ニッシン・ソル等であった。協力者の中
で、最も活動的であり、その後にも重要な役割を果たす
人物として、エマヌエル・カラツソがいた。

サラニカで、シオニスト運動に協力的であった組織とし

てフリーメイソンがあり、ユダヤ教徒のエマヌエル・カラツソの他に、転向ユダヤ教徒のジャヴィドもその立場から、よくその名を知られていた。ジャヴィドはスペイン系のロッジに属しておりフィリトという名のロッジの支配人であった。ジャヴィドはサロニカ生まれで、ユダヤ教徒の家族出身である。彼らはドンメ（転向ユダヤ）と呼ばれていた。ドンメとは、ユダヤ教徒であったが、イスラム教に改宗した人たちへ与えられた名称である。オスマン帝国のドンメはイスラム教徒のように生活していたが、秘かにユダヤ教の信仰を持続して、その集団は宗教別支配の枠の中ではイスラム教徒とは別にされていたと言われる者もいた。エマヌエル・カラツソは転向ユダヤ教徒ではなかった。

エマヌエル・カラツソは一八六二年サロニカで誕生した。一族は、有名なユダヤ教徒商人であった。一八八〇年に一族はイタリア国籍から離脱して、スペイン国籍に移っている。さらに、オスマン国籍に移動している。トルコ共和国成立後に制定された苗字法によって、カラスを姓として使用していた。エマヌエル・カラツソは初等教育をサロニカで受け、その後法律学校で法律を学び、弁護士となった。サロニカの法律学校で、犯罪学を講義したこともあった。彼は、ユダヤ教徒としての活動と同時にフリーメイソンのメンバーとしても有名であり、イタリア国籍であったこと

からイタリア系のロッジに属し、彼自身が一九〇四年に設立したマケドニア・リブルタ・ロッジの支配人であった。

テオドル・ヘルツルはスルタン、アブドゥル・ハミド二世と意見の対立があるとも、スルトンの協力なしにシオニズム運動は実行できないと考えていた。エマヌエル・カラツソもテオドル・ヘルツルと同じように、シオニズム運動支援を開始した当初は、スルタン、アブドゥル・ハミド二世の協力が必要であると考えていたと思われる。アブドゥル・ハミド二世の約三十年にわたる専制政治を支えたと言われる有名な密告制度である、ジャーナル（通報）を二回アブドゥル・ハミド二世に送っている。一つは、サロニカで、禁止されているパリからの出版物が公然とカフェなどで読まれているとの内容であり、末尾にはサロニカの弁護士エマヌエル・カラツソとのサインがなされていた。

エマヌエル・カラツソはテオドル・ヘルツルが一九〇一年九月十七日の第二回目のアブドゥル・ハミド二世との会見に立ち会っている。この時に代表団は二千万フランをオスマン財政に寄付することを申し出ている。前述のごとく、スルタン、アブドゥル・ハミド二世はこの申し出を拒否した。エマヌエル・カラツソはさらに、一九〇四年にもシオニスト代表団をともなってスルタン、アブドゥル・ハミド二世と会見して、パレスチナの地を提供してくれるように

申し出たが、スルタンの拒否にあつてゐる。²⁸⁾

エマヌエルⅡカラッソは、一九〇四年のアブドゥルⅡハミド二世との会見で、シオニズム運動にまったく否定的なことを確認した。このため、アブドゥルⅡハミド二世と対立する勢力との協力で、アブドゥルⅡハミド二世後の運動展開を計画した。彼自身の目的は、アブデゥルⅡハミド二世に反対しする組織を支援することであつた。また、アブドゥルⅡハミド二世廢位やその後の経過を見ると、シオニズム運動支援活動は彼の事業の一部であつたと考えられる。アブドゥルⅡハミド二世が、一九七八年に憲法の効力を停止し、その後長期にわたり専制政治を行ったことは、オスマン政治に対するヨーロッパ列強の内政干渉や利権の獲得競争を激化させ、オスマン帝国の人たち、とくにイスラム教徒の生活不安を増大させた。このため、オスマン帝国各地に憲法の復活を要求する反政府運動が発生した。また、列強の支援によって、アラブやアルメニア教徒などの反政府組織も生まれた。

アブドゥルⅡハミド二世の専制政治に反対し、憲法の復活を求める活動をしていたのは、青年トルコ人運動であつた。その中心的組織は、一八八九年にイブラヒムⅡテモによって創設された統一と進歩委員会であつた。エマヌエルⅡカラッソはこの統一と進歩委員会との接触により、帝国内

のシオニズム運動を育成拡大していこうと考えた。統一と進歩委員会は、その後アブドゥルⅡハミド二世の彈圧によって帝国内の組織は壊滅状態になつた。このため、オスマン帝国内での活動は弱体であつた。しかし、メンバーの一部は国内で活動を続けていたが、アブドゥルⅡハミド二世の専制政治打倒のための憲法復活運動は直接行動に移ることはできなかつた。²⁹⁾

このような状況の中で、一九〇六年九月サロニカにおいて、タラートなどを中心にアブドゥルⅡハミド二世の専制政治打倒の目的をもつた組織が成立した。この組織は、オスマン自由委員会の名称を初期には用いた。しかし、その後、統一と進歩委員会の一分派とも言うべきパリ在住のアフメトⅡルザが本部を統括する進歩と統一委員会との接触し、進歩と統一委員会サロニカ本部となつた。一九〇八年、サロニカ本部の支部として成立し本部を称した進歩と統一委員会マナストゥル本部に所属するニヤージⅡベイの武装蜂起によって、アブドゥルⅡハミド二世が憲法の復活を宣言した。ただちに、進歩と統一委員会サロニカ本部は統一と進歩委員会サロニカ本部と改称し、イスタンブルに代表を送り込み政權への道を進んだ。しかし、オスマン政界は新参の若者が組閣することを許さなかつた。このため、議會を支配することによって、陰で影響力を行使した。スル

タンの任命議員によって構成される元老院議員となったベフォルルエフェンデイはヤコブソンに対して、シオニズムに反対しないと声明した。また、庶民院では、シオニズム運動家のエマヌエルカラツソやネシソルソ、ネシソマズリヤフが選挙によって選出されていた。彼らは統一と進歩委員会サロニカ本部勢力と協調していた。一九一三年クーデタによって統一と進歩委員会は自から内閣をつくることができた。

七 統一と進歩委員会とエマヌエルカラツソ

オスマン自由委員会は、統一と進歩委員会の初期にエディルネで加入したタラートが、逮捕され、その後追放されたサロニカで中心となって組織したものであった。彼はミトハトシユキュリュやキャズムハミ(ドウル)などと会合して設立した。

最初の会合は、サロニカのオリンポス広場の近くのヨノヨというカジノで集まっていたが、監視の目が厳しく場所を替えたといわれる。この新たな場所を提供したのがユダヤ教徒弁護士のエマヌエルカラツソであった。タラートとエマヌエルカラツソの最初の接触はこのカジノ、ヨノヨであったとされる。オスマン自由委員会を組織する計

画にエマヌエルカラツソは最初から関係していたが、組織内においての立場は不明である。

キャズムカラベキルによれば、はじめ、アブドゥルハミド二世の専制政治に反対する会合を一九〇六年八月二十九日おこなったが、オスマンの官憲の注目を受けないことを理由に、フリーメイソンのロッジを利用した。この会合の場所を提供したのは、マケドニアアリゾルタルロッジの設立者エマヌエルカラツソであった。この会合には、後のオスマン自由委員会の創設メンバーとなる十人が含まれていた。そのほか約七十人が計画に参加したとされる。タラートは、アブドゥルハミド二世の重病との情報を理由に直ちに行動しなければならぬと決断した。七十人の大所帯では行動に敏速性が失われると考え、緊急集会と称して、上記の十人が参加した。この十人が中心となり組織の基本部分を作った。

しかし、参加者のラフミルベイは十人の集会であっても監視の目を逃れることは難しいとして、早急に解散することが提案され、解散した。しかし、ラフミ、タラート、ミトハトシユキュリュ、イスマイルジャンボラトの四人が後に残り、自らが組織の中心となることを決定した。一九〇六年九月五日の、オメルナジルベイの自宅で開催された集会で、オスマン自由委員会の名称が決定した。

これら十人のうち、ミトハトシキュキュリュとキヤーズムシナミは回顧録を著している。これらの個人として残した記録には、フリーメイソンとの関係に言及していない。フリーメイソンとの関係を明らかにすることを避けていると思われる。テヴフィクシチャウダルは、エマヌエルシラツソはタラートらにヨンヨシカジノのとなりの建物の二階の部屋を提供した。この部屋をしばしば会合に使用したと述べている。フリーメイソンのロッジとの表現をしていない。³³しかし、初期のメンバーであり、エンヴェルとともに進歩と統一委員会マナストウル本部を設立したキャズムシカラベキルは、フリーメイソンには加入していないが、エマヌエルシラツソの主宰するフリーメイソンのロッジで会合したと述べている。これらのことからエマヌエルシラツソの援助を受けてタラートらはオスマン自由委員会を設立したといえる。

オスマン自由委員会の成立に当たって、基本メンバーに名を連ねてはいないが、エマヌエルシラツソは常に重要な役割を果たしている。秘密結社としての最初の会合の場の提供、さらに秘密の保持のための諸活動などである。秘密結社としてのフリーメイソンの組織に関するものとして、加入の儀式は、この時から導入されたものと考えられる。ラムサウルによれば、イブラヒムシテモが統一と進歩委員

会創設の前年に故郷のアルバニアに帰省しての帰路、イタリアのプリンディシを経由していたことから、この地のフリーメイソンのロッジを訪ね、その組織に関する知識を得たとしている。³⁴しかし、彼はスルトン、アブドゥルシラツソを退位させたパシヤたちの組織を模倣したと記している。³⁵

このように組織の設立に強力な支援を行ったエマヌエルシラツソはオスマン自由委員会にはじめから正式メンバーとして参加したのではなく、彼の受けた進歩と統一委員会サロニカ本部メンバーとしての番号は一七一番であった。上記の組織の基本をつくった十人が一番から十番までの番号を占めた。その後の加入者は一一番から始まった。エマヌエルシラツソの加入は、一八五番の騎兵大尉ジンヌンシベイが一九〇七年九月に加入しているからそれ以前であり、マナストウル本部の結成が一九〇七年二月八日であり、この時までにはサロニカで、加入していた人数は四十二人であったことから一五二番となるので、彼の加入時期は、一九〇七年の前半であったと考えられる。³⁶

エマヌエルシラツソの進歩と統一委員会サロニカ本部加入はユダヤ教徒としてはじめてであった。以後に改宗ユダヤ教徒、ウラフ（ヴラフ）、アルメニア人、ユダヤ教徒の加入が認められるようになった。これらの多くは将校や医者などの知識人たちであった。³⁷すなわち、進歩と統一

委員会サロニカ本部はイスラム教徒が中心の組織であったといえる。このため、非イスラム教徒はメンバーとして対象から外されていた。それゆえ、エマヌエル・カラツソは外部からの支援者としての存在となったと考えられる。

一九〇八年の憲法回復によって、国会が再開されると、進歩と統一委員会サロニカ本部は統一と進歩委員会と名称を換え、政権への道を模索し始めた。大宰相府などの行政権への道は遠かったため、国会の議員獲得を計画し議会の力を背景にオスマン政界に進出した。エマヌエル・カラツソも統一と進歩委員会と協力して、サロニカ選出のユダヤ人の庶民院議員となった。この立場からシオニスト運動を支援した。議会を背景に強い影響力を持った統一と進歩委員会は、元マケドニアの三州総督であったヒュセイーン・ヒルミ・パシャを推薦して大宰相の地位につけると、政府に對してきわめて強い影響力を持つことができた。そしてシオニズムを支援する立場から、ヒュセイーン・ヒルミ・パシャ内閣をして、ユダヤのパレスチナ巡礼を三カ月間に限定する赤いビザを廃止し、パレスチナで、ユダヤ教徒移住者が土地を購入する自由を認めた。これによって、東ヨーロッパを中心とする移住希望ユダヤ教徒は、パレスチナへの移住が可能となった。しかし、オスマン帝国内のユダヤ教徒のパレスチナへの移動は少なく、ロシアのユダヤ教徒弾圧

を逃れようとした人たちだけであった。

しかし、シオニズム運動が活発化すると、政府は国土分割の危機を感じはじめ、再び、赤いビザが復活し、ユダヤ教徒の移住は制限された。

むすび

国民の統一性を要求される近代国家建設の過程で次第に顕在化されてきたユダヤ人排斥運動に対する、自らの立場を解決する手段として、ユダヤ人が生み出したのが自らの国民国家を成立させることを目的としたシオニズム運動であった。シオニズム運動は近代になって新しく生じた問題であり、ローマ時代に各地に離散したとされるユダヤ教徒の問題解決の手段ではなかった。

このシオニズム運動の国家建設地が、はじめは、アルゼンチンかパレスチナどちらに向かうかといったことが検討されていた。このことは、ユダヤ教徒の国家として成立できるならば、パレスチナ以外の土地も対象となっていたことを示している。また、イギリス政府は彼らにウガンダを建国地にすることを提案している。¹⁰⁾

すなわちこのシオニズムの問題は、近代国民国家建設の

問題の一環であり、ヨーロッパにおける、ユダヤ国家を形成するためのヨーロッパのユダヤ人創設問題であった。

国民国家は国民が地域と直接同一条件で結び付いた場合には容易に成立できたが、地域と結び付かない国民形成はきわめて困難な問題であることを明らかにしている。例えばユダヤ教も含めて少数派の宗教集団や、遊牧民などの移動を生活基盤とするものなどの場合は、ヨーロッパの近代の国民国家概念では、解決できない粹外の問題点であった。このため、近代国民国家はこれらの人々を完全に無視して形成された。

ユダヤが国家建設を目指すために、国民形成がなされなければならなかった。しかし、彼らの持つ地域性の欠如が越えなければならぬ重大な障壁であった。このため、地域性を獲得するために、彼らがかつて居住したとされる伝説的なシオンの地を統一的居住地とすべきであるとの理論が創設された。このように、シオニズムの原点は、近代ナシオナリズムの命題である国家と民族の問題、すなわち、国民形成である。ユダヤ教徒を一つの民族として規定して、ユダヤ民族を新たに創設して、その集団が居住する明確な地域を創り出さなければならなかった。彼らの名称の由来から、地域性を求めるとき、彼らが居住することを明確にすることのできる地は、旧約聖書に基づくパレスチナの地

としたのである。

パレスチナの地を領域に持つオスマン帝国では、ヨーロッパとは異なった国家体制であったため、問題はより複雑化した。オスマン帝国の国民形成問題は、オスマン帝国崩壊の中で、ムスタファ・ケマル・アタチュルクのトルコ共和国建設した時期に、トルコ人創設問題として生まれた。オスマン帝国で、近代の国民国家の思想は、二十世紀には入ってからようやく成長してきた問題であった。この点で、シオニズム運動が、国民国家認識を持たないオスマン帝国の支配者をはじめとする人々との間にさまざまな確執を生み出した。前述のごとく、国民意識の創設がヨーロッパであっても様々な問題点を含んでいたことは、明白であり、近代世界の解決がきわめて困難な問題の一つであったことを示している。

シオニズム運動は、オスマン国内では、テオドル・ヘルツルの影響を受けたサロニカのユダヤ教徒、エマヌエル・カラツソによって推進された。彼は、アブドゥル・ハミド二世が、シオニズム運動に対して否定的な立場であったことから、スルタンの庇護によるユダヤ教徒のパレスチナ移住計画は不可能であると考えた。その結果、アブドゥル・ハミド二世の政策に反対する組織とむすびついた。アブドゥル・ハミド二世の専制政治は、オスマン帝国はヨーロッパ

列強の内政干渉により、知識人や軍人はオスマン帝国の衰退を促進するものと考え、憲法を復活してスルタンの専制政治打倒をめざす青年トルコ人運動が活発化していた。エマヌエル・カラッソは、この青年トルコ人運動の中心的存在となった後の統一と進歩委員会サロニカ本部の結成を援助することによって、政治的影響力を増大させていった。

この結果、統一と進歩委員会サロニカ本部が政権に裏面から影響力を行使できるようになると、シオニズム運動も次第に有利な方向へ、導いていき、東ヨーロッパのパレスチナへの移住希望者の擁護者となっていった。

しかし、オスマン帝国内のユダヤ教徒は、シオニズム運動ばかりでなく勢力の拡大にさまざまな手段をとっていた。特に、シオニズム支援のエマヌエル・カラッソは、各地の反オスマン運動への武器売却などで、オスマン政府から敵対者として指摘され、国外への逃亡を余儀なくされ、シオニズム運動は急速にオスマン帝国中央で力を失っていった。

註

- (1) テオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家 ユダヤ人問題の現代的解決の試み』佐藤康彦訳 法政大学出版局 一九九一年
- (2) Ibid. p.9.
- (3) Ibid. p.9.

- (4) Ibid. p.13.
- (5) Ibid. p.14.
- (6) Ibid. p.29.
- (7) 一九〇八年の憲法回復により統一と進歩委員会が組閣した時、イスタンブールの治安関係の役職にサロニカ出身のユダヤ教徒が入っていた。エマヌエル・カラッソ、ジャヴイド、ネシム・ソルン、メルハ・サレム、ハバル・サムエル・イジセルらとそれらとに談話した。Süleyman KOCABAS "Kendi İtirafıyla Jön Türkler Nerede Yenildi?" İstanbul, 1991, p.307.
- (8) Ibid. p.100.
- (9) Stanford J. SHAW "The Jews of the Ottoman Empire and the Turkish Republic" London, 1991, p.216.
- (10) メイヤール・レヴィン『イスラエル建国物語』岳真也・武者圭子訳 一九九四年 四五頁
- (11) KOCABAS, op.cit. P.301.
- (12) TAHSIN PAŞA "Sultan Abdülhamid" İstanbul, 1990, pp.110-111
- (13) フィリップ・ネウリンスキ Philip Newlinsky はポーランド人である。フィリップ・ネウリンスキ二世と親しかった。
- (14) KOCABAS Ibid. p.101.
- (15) Ibid. p.101-102.
- (16) アルミンヌス・ヴァンベリ Arminius Vanbery イギリス人。ヨーロッパに広がるフィリップ・ネウリンスキ二世の情報収集活動をした。Ibid. p.102.

オスマン帝国末期のユダヤ教徒問題（設樂）

- (16) Ibid. p.102.
- (17) TAHSIN PAŞA, op.cit. p.110.
- (18) Ibid. p.110.
- (19) Ibid. p.111.
- (20) Ibid. p.111.
- (21) Ibid. p.111.
- (22) ヤコブソン Dr.Jacobson シオニズム運動家の一人、イスタンブルのマングロレーヴェンヤ銀行の支配人、シオニズムがオスマン帝国の世論の支持を受け入れられるように新聞を発行した。 KOCABAS, op.cit. P.302.
- (23) Ibid. p.103-104.
- (24) Ibid. p.114-118.
- (25) エマヌエル・カラッソは、一九〇八年の選挙でサロニカから庶民院の代議士となった。一九〇九年に発生した三・三一事件といわれる通称反革命事件に連座したとしてスルタン、アブドゥル・ハミッド二世が廃位されたとき、その通告者の中に、ユダヤ教徒の彼がいたことも後に問題となった。カズム・アルバニアがオスマン帝国からの独立運動展開すると、イタリアから武器を送って運動を支援するなど、反オスマンの行動が次第に明かとなり、第一次世界大戦後、イタリアに逃亡し、トリエステに居住した。常にイタリアのパスポートを携帯していたといわれ、国籍はサロニカがバルカン戦争でギリシアに占領された混乱のためか書類が散逸してしまったといわれるため、未だ明確ではない。一九三四年イタリアで死去。
Ibid. pp.105-109.
- (26) KOCABAS, op.cit.P.106.
- (27) Ibid. p.106.
- (28) Ibid. p.107
- (29) 青年マルロコ人運動は、オスマン国内ではほとんど活動できず、パリ、ジュネーヴ、など国外の出版活動が中心であった。
- (30) Ibid. p.300.
- (31) Mithat Sükrü BLEDA "İmparatorlug'un Çokluğu" İstanbul, 1979.
- (32) Kazım Nami DURU "Arnavutluk ve Makedonya Hatıralarım" İstanbul, 1955.
- (33) Kazım KARABEKİR "İttihat ve Terakki Cemiyeti 1896-1909" İstanbul, 1993, p.175
- (34) Tefik ÇAVDAR "İttihat ve Terakki" İstanbul, 1991.
- (35) Ernest E. Ramsaur "The young Turks Prelude to the Revolution of 1908" Newyork. 1957, p.15-16 Footnot,
- (36) İbrahim TEMO "İttihat ve Terakki anılarım" İstanbul 1990 p.17.
- (37) Karabekir op.cit. pp.177-178,188.
- (38) キャズム・ナミはシオニスムは進歩と統一委員会サロニカ本部には受け入れなかったと記している。 Kazım Nami, op.cit.p.32.
- (39) KOCABAS, op.cit. pp.304.
- (40) Ibid. p.306.
- (41) 第一回シオニスト大会ではこのイギリスのウガンダ建国提

案を受け入れている。しかしその後、ロシアのシオニスト運動家によって実施は阻止された。

(41) バルカン半島で遊牧をしていたキリスト教徒のウラフ人たちはサロニカとオーストリアなどを結ぶ陸上運輸にたづさわっていた。オスマン帝国支配下にあったときはウラフ人の項目があり人口調査の対象となっていた。しかし、バルカン諸国が独立していく中で、定住していなかったために、国家を建設することもできず、現在多くの国で、ジプシーとして統計に入れられている。

(42) トルコ共和国では、独立後キリスト教徒をギリシアに移動させ、ギリシアからイスラム教徒を受け入れ、トルコ共和国の国民をオスマン帝国時代のものとは異なったトルコ人として自ら認識させた。